

春岡村の伝説

深作の氷川神社の幟（のぼり）

新年を迎え、初詣に行かれた方も多いのではないのでしょうか。私たちが住んでいる東三番街は江戸時代は深作村に属し、村の鎮守は深作の氷川神社でした。ここには二つの鳥居があり、向かって左側が氷川神社、右側は諏訪神社の鳥居です。新年には鳥居に大きな幟が立てられます。氷川神社の現在の幟は昭和48年に大宮の氷川神社の当時の宮司東角井光臣によって書かれたものですが、それ以前は天保4年（1833）に氏子によって奉納された縦10m横1m、書家巻菱湖（まきりょうこ）による書を染めぬいたものでした。

幟に書かれた文字

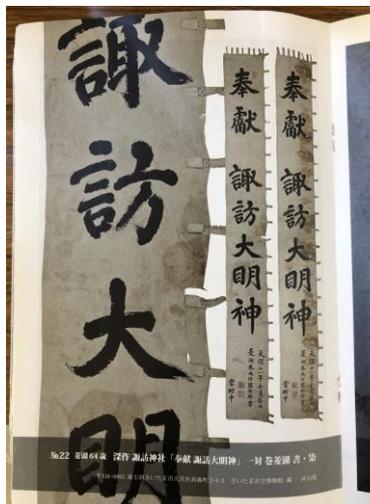
奉献 氷川大明神 天保癸（みずのと）巳（み）六月吉日 菱湖大任書 深作村氏子中
奉献 諏訪大明神 天保十一年七月吉日 巻菱湖大任盥漱拜書 當（当）村中
（盥漱拜書とは手を洗い口をすすいで身を清め敬意を持って文字を書いたという意味）

書家巻菱湖は幕末の三筆のうちの一人で、新潟に生まれ、幼いころから書をたしなみ、11歳の時には長岡藩主の前で席書きをするほどの腕前でした。後に江戸に出て書塾を開き、その書は菱湖流と呼ばれ手本は200種以上刊行されたといわれます。将棋が好きな方なら将棋の駒の字体でも人気なのでその名前を耳にしたことがあるかもしれません。

そんな大家がなぜ深作村の幟の字を書いたのでしょうか。これについては次回のお楽しみ。
（古い幟の写真は巻菱湖記念時代館発行『〇ごと巻菱湖』より。実物はさいたま市立博物館蔵）

（※）氷川神社の幟の情報及び資料は深作に代々続く旧家の方からお寄せいただきました。

（※）現在春野図書館では巻菱湖の資料を展示しています（1月中）。他にも地元の方の蔵などから出てきた第二次世界大戦開戦当時の新聞や春岡村にまつわる明治大正時代の資料を展示しています。



東三番街 平山由喜